



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	今井 道夫「思想史のなかのエルンスト・マッハー科学と哲学のあいだ」
Author(s)	坂井, 昭宏
Description	
Citation	哲学, 38, 163-169
Issue Date	2002-07-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/48018
Type	departmental bulletin paper
File Information	38_163-169.pdf



《書評》

今井道夫 『思想史のなかのエルンスト・マッハ

―科学と哲学のあいだ』（東信堂）

坂井昭宏

マッハに関しては、論理実証主義の祖、相対性理論の先駆者という評価があり、またレーニンによる古典的批判もあるが、何れもマッハの思想の全体を的確に捉えているとはいえない。比較的妥当なのは、マッハの哲学的営為の意図を統一科学の理念の希求に見るフィリップ・フランクの見解であるが、マッハ哲学を「啓蒙主義の哲学」と見て、その合理的批判的精神を強調する点ではいまだ一面的である。

今井氏がマッハ思想の根底に見出すのは合理主義ではなく、むしろ神秘主義である。これ大胆な提言である。今井氏はこの主張をどのようにして立証しようとするのか。以下、本書の概要を簡潔に紹介しよう。

第1部 エルンスト・マッハの認識論

第1章 エルンスト・マッハ論序説

従来の理解では、マッハの『力学史』などに見られる物理学論が感覚一元論に依拠することは強調されてきたが、さら

に立ち入って物理学論と感覚生理学の内的連関を説明する必要がある。マッハは計測的空間(物理学的空間)を生理学的空間(感性的直観的空間)に関係づけることによって相対化し、この空間把握を身体論的、行動論的方向から肉づけする。空間感覚は両眼をもち、腕や手足をもった身体という具体性において捉えられ、視空間、触空間、聴空間等は身体の運動を媒介にして統一的に把握される。

第2章 エルンスト・マッハの認識論

マッハはみずから『感覚の分析』を「認識論的転回の試み」と位置づける。彼の要素説と思惟経済説はこの転回の基礎として構想されたのである。マッハは存在と認識の根拠を感覚にのみ求め、この感覚の実質を要素と呼ぶ。要素は、(1) ABC…: 普通に物体と呼ばれる色、音などの複合体。(2) KLM…: 身体と呼ばれる複合体、(3) $\alpha\beta\gamma$ …: 意志、記憶像などの複合体の三種に類別され、(2) KLM…: を媒介にして相互に規定し合う。すなわち、 $\alpha\beta\gamma$ …: による ABC…: の模写が物理学であり、生理学は KLM…: 相互間およびそれらの ABC…: に対する関係を $\alpha\beta\gamma$ …: で模写するとされる。他方、思惟経済説とはより少ない思惟作用で多くの事実を理解することである。

ここから、ヘーニスヴァルトは「流れる意識による経済的「流れの把握」ということでマッハは何を考えているのか」と批判した。この批判は科学理論を確固とした主体(自我)による事象の「説明」と見る立場に立脚する。これに対して、マッハは「説明」は因果概念などの形而上学的前提に結びつくと考え、科学の役割を「記述」に置いた。すなわち、「記述」とは要素間の関数的依存関係を確定し、諸要素の関連を $\alpha\beta\gamma$ …: で模写することである。マッハの立場では、自我は諸要素の集合にすぎないが、諸要素に自他の区別を認め、「諸要素を未分析の複合体に帰属させる因習」を免れている。反対に、ヘーニスヴァルトは「科学者が慎重に試みる漸近法をまったく見落としている。」同時に、マッハが思惟経済説に生物学的基底を認めるかぎり、主体を諸要素の複合体以上のものと見る可能性も残されている。

第3章 探究の論理と心理―エルンスト・マッハ『認識と誤謬』に即して

マッハは『認識と誤謬』序文で「いかなるマッハ哲学も存在しないのであつて、たかだか自然科学的方法論と認識心理学があるだけである」と述べている。前者の核をなすのが要素説と思维経済説であるが、科学はたえず「概念を駆使するかぎり、感覚要素と「概念」の関係を明らかにする必要がある。概念は独自の役割をもつが、事実はいつそう豊かであり汲み尽くすことはできない。同様に、感覚要素も事実を起点にするが、概念的な働きを課されている。したがって、マッハは「要素」を概念と事実とを繋ぐもの、両者の間を往還する両面的なものとして理解していたと考えられる。後者に関して、マッハは帰納法よりも「類比」すなわち「部分的同一性である類似の特殊ケース」に注目する。事実には類比による推測を加えることによって経験の拡大がえられるが、記述は仮説的認識が検証を経てその補足性を狭めて行く過程とされるのである。

第2部 エルンストマッハの「哲学」

第4章 マッハ哲学の源泉

ラッセルは神秘主義の一般的傾向を、(1) 推論的分析的知識に対立する突然の透徹した威圧的な知識への信頼、(2) 合一への信仰、(3) 時間の實在性の否定、(4) 悪および善が幻影であるという見方を挙げている。こうした諸特徴を参考にするなら、マッハの思想と神秘主義との親近性を以下のように指摘できる。(1) 要素説は自我の諸要素へ解消し、意志的契機を生物的反応へ還元する。(2) 思维経済説は思维止揚の契機と広大な経験領域との一体化の契機からなっている。(3) マッハは因果関係など形而上学的前提の排除に努めたが、因果的説明の排除はエックハルトに顕著に見られるように、神秘主義の伝統にも属する。(4) K・ポッパーなど合理的啓蒙主義者は進歩の停止を科学の終焉と見るのに対

して、マッハは記述の完成ないしは完成された科学を思い描いている。

正確には、マッハには啓蒙主義的合理的思惟と神秘主義的思惟が併存しているというべきであるが、この併存が19世紀以降のヨーロッパ精神史を考察する上での一つの鍵となる。実際、オーストリア思想界の次世代といえるウィトゲンシュタインやムージルにも神秘主義との接点を見出すことができる。

第5章 思想史のなかのエルンスト・マッハ

『感覚の分析』第一章の挿し絵、すなわち「眉毛半弓、鼻、および口髭からなる枠のうちに」囲まれた胴体と手足を手がかりに、エルンスト・ブロッホは洞察力あふれたマッハ論『鏡なしの自画像』を書いた。マッハ自身はこれを「首（頭）のない自画像」と呼ぶ。この独特の自画像は、マッハ自身の若い日の突然の直観、「私の自我を含めた世界は関連し合った感覚の一集団である。唯、自我においては一層強く関連し合っているだけである」に支えられている。

マッハも自己自身の無意識、夢、子供時代の観念連合に対して繊細な感受性をもっていたが、フロイト的心理学の方角に進むことはなかった。マッハは自我という心的単位を相対化し、心的作用を軽視する傾向があつたからである。また、マッハは「マッハ哲学は存在しない」と公言した。この発言は新カント派との対立で理解されることが多いが、その背景にはブレントノーの特異な哲学史観がある。それによれば、マッハの哲学は近代哲学衰退過程の第3期に位置づけられるが、ここから上述のマッハの発言の真意が明らかになる。すなわち、当時の正統派講壇哲学との絶縁である。

第6章 エルンスト・マッハと回転運動の問題

内耳三半規管が平衡感覚もしくは運動感覚を司る器官であることは、マッハ、ウィーンの医師ブロイアー、エジンバラの化学者クラム・ブラウンによつて相互に独立に、一八七三年末から一八七四年初めにかけて発表されたが、マッハは独創性は力学的実験装置なかでハトやウサギの反応を見ることによつてその物理学的側面を解明し、平衡感覚を運動感覚、

正確に加速度運動感覚として明らかにしたことにある。この回転運動論は後の『力学史』におけるニュートンの絶対空間批判の重要な基礎をなしている。

第3部 マッハ『哲学』の後と先

第7章 ローベルト・ムージルの学位論文―『マッハ学説の判定への寄与』の検討

ムージルの学位論文『マッハ学説の判定への寄与』(1908)は新カント主義の立場からのマッハ批判と見なされているが、リヒアルト・ヘーニスヴァルト『マッハ哲学批判のために』(1903)、ラインホルト・シュルツ『マッハの認識論。叙述と批判』(1907)などに比較すると、それほど優れた内容とはいえない。他方、師のカール・シュトゥンプはすでにマッハ批判(1896)を発表しており、ムージルはシュトゥンプの指導で最初の草稿を修正し改題して、翌年再提出したという経緯がある。この点を考慮するなら、新カント主義の観点からのマッハ批判はムージルの本意ではなかったという可能性も残される。ムージルの学位論文は不成功に終わったが、その叙述に二〇世紀の思想的課題に直面した作家の若き日の苦闘の痕跡を読みとることができる。

第8章 グスタフ・テオドール・フェヒナーの哲学

フェヒナーはマッハ、W・ジェームズ、G・フロイトなど世紀転換期の思想家たちに少なからぬ影響を与えたが、フェヒナーから見ればマッハは旧来のヘルバルト流の心理学を温存し、マッハから見ればフェヒナーの心理・物理平行論は形而上学的であつたことになる。また、ジェームズは心理学者としてフェヒナーに批判的であつたが、晩年になつて哲学に対する関心を深めるとともに彼の長所を認めるに至つた。さらに、フロイトは快楽原則の定式化など哲学的思索をする際に率直にフェヒナーを参照する。これはフェヒナーとフロイトの間の世代的な距離によるものと考えられる。

最終章 マッハ論の現在―あとがきかえて

わが国におけるマッハ研究の歴史的概観と欧米の最近の研究動向を完結に紹介する。欧米では、ハラ―/シュタドラー(編)『エルンスト・マッハ―業績と影響』(R. Haller & F. Stadler (Hrsg.), *Ernst Mach. Werke und Wirkung*, Holder-Pichler-Tempsky, 1988)以降、マッハに関する新資料の発掘と紹介が盛んであるが、本研究に見られるようなマッハ像の統一的把握の試みはいまだされていない。

以上のように、著者はマッハ思想の核心を「神秘主義的思惟形式」に求め、その全体像を解明を試みるのであるが、この試みはマッハ自身が直接神秘主義に論及する箇所が少ないことから、マッハと同時代の科学者や哲学者との関わりに考察の重点を移さざるをえない。ここから、本研究は一九世紀末から二〇世紀初頭のドイツ・オーストリアの思想状況の解明をもう一つの主題とするにいたる。実際、本研究の副題―科学と哲学のあいだ―が示すように、第4章、第5章、第7章は本研究の中でもっとも成功した部分である。また、第6章は心理・生理学史と物理学史の接点に関わる研究として独自の評価に値する。

実際、第三部第7章は、“Musil Between Mach and Stumpf”, といふ題で J. Blackmore, R. Itagaki & S. Tanaka (eds.), *Ernst Mach's Vienna 1895-1930-Or Phenomenalism as Philosophy of Science*, Kluwer, 2001, pp.187-209 に掲載された。ここから明らかにように、著者のマッハ研究が国際的にも高い評価を受けているのである。

他方、著者は第3章でマッハが思惟経済説に生物学的基底を認めるかぎり、主体を諸要素の複合体以上のもつと見る可能性も残されていると指摘するが、それ以上の論及はなされていない。また、第6章を除いて、本研究全体としてマッハの物理学研究に対する論及が少ない。とくに、本章でもその重要性が指摘されているにもかかわらず、マッハの空間論は考

察の対象とされていない。本書がわが国で最初の本格的なマツハ「哲学」の研究として高い評価を受けることは議論の余地のないところであるが、上述の点をも含めて著者によるマツハ論の新たな展開を期待したい。

(二〇〇一年 二三八頁)